

徳川家康公 と駿府

Tokugawa Ieyasu in Sumpu

静岡大学名誉教授・文学博士

小和田哲男氏

Tetsuo Owada



経歴

1944年(昭和19年)静岡市生まれ。早稲田大学大学院文学研究科博士課程修了。1973年、静岡大学教育学部講師、助教授、教授を経て2009年、定年退職。現在、同大学名誉教授、文学博士。専門は戦国時代史。NHK大河ドラマ「江～姫たちの戦国～」の時代考証をつとめている。

渡辺重明「在りし日の駿府城」(平成の駿府城をつくる会提供)



リーダーとしての徳川家康の魅力

戦国武将は、その名の通り武将であるが、同時に自分の領国を支配する経営者でもあった。単に戦に強いだけでなく、領国経営の面でもその資質が問われており、リーダーシップといった観点からも戦国武将を評価する試みが行われている。

従来、そうした戦国武将ランキングは、どちらかといえば、人気度が主であった。ところが最近では、実力を評価する動きとなり、徳川家康は上位にランク付けされるようになってきた。

リーダーとしての家康の魅力の二つはその安定感にあったと考えている。いかなる危機・困難に陥ったときも、あわてふためかず、泰然自若としていた。たと

えば、永禄三年(一五六〇)五月十九日の桶狭間の戦いのとき、家康は大高城にいて、今川義元の到着を待っていた。ところが、義元は途中で織田信長の奇襲をうけて討たれ、夜になってその知らせが家康のところに入った。

そのようなとき、ふつうならば、大あわてで、大高城を出て、三河に逃げもどるところであろう。ところが、家康は、翌日、明るくなつてから大高城を出ているのである。暗い中を逃げていけば、落武者狩りにあう危険が高いことを知っていて、そうした行動をとったのである。このとき、家康はまだ十九歳だった。

魅力の二つ目は、家康のみごとな組